
となりのおばさん

マイマイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

となりのおばさん

【Nコード】

N0190Z

【作者名】

マイマイ

【あらすじ】

念願のマイホームを手に入れたけれど、隣に住むおばさんがちょっと変なひとで、私の家を覗いている？
ちよっと怖いお話です。短いので気楽に読んでいただけたらうれしいです。

となりのおばさんは、ちょっとおかしい。

わたしが玄関先の花にお水をあげていたら、水の音がうるさいとい
ってジョウロを叩き落とされた。

旦那の博之と手をつないで玄関を出たら、下品だ、はしたない、と
怒鳴られた。

うちの庭の木の葉が、おばさんの庭に何枚も落ちてきたと言って、
一日中おばさんの庭を掃除させられたこともある。

もう、うんざり。

せっかく念願のマイホームを手に入れたのに、なんだかケチをつけ
られたみたい。

博之に相談したけど、気にするなよ、なんて笑われるだけ。

休みの日だって家にいないんだから、まるで他人事みたい。

ああ、毎日毎日、いつまでこんなことが続くんだろう？

ところが、ある日を境に、おばさんはとっても静かになった。

以前は部屋の中で音楽を聴いているだけでも、うるさいといって怒鳴りこんできたのに、

なんにも言って来なくなった。

あんまり急におとなしくなったから、逆に気持ちが悪い。

そういえば毎朝していた玄関周りの掃き掃除も、最近はしてないみたい。

博之にそのことを話すと、わたしの顔を不思議そうにみつめて、少し黙った後、静かになったんならいいじゃないか、と言った。

まあ、そうなんだけど。

でもね、おばさんは静かになった代わりにね。

気がつくといつも、窓からこっちを覗いているの。

黄色く濁ったような、いやな目。

台所、寝室、浴室。あらゆる窓から、いつもあの目がわたしたちを見ている。

ううん、気のせいなんかじゃないわ。

いつも同じ、首に赤いスカーフを巻いて、こっちを見ているのよ。

博之はおおげさに、お腹を抱えて笑いだした。

なんだい、それ。赤いスカーフって、そんなのいまどき巻いてるひ
といるのかい？

とにかく、もう考えるのはやめたほうがいいよ。

きつと、疲れているんだよ。

今夜は早く寝よう。そう言って、博之はわたしの頭を優しく撫でた。

それでもわたしは、どうしても気のせいだと思えない。

あれは絶対、おばさんの目だ。

> 改ページ <

あんまり気持ち悪いから、博之に「警察に相談したい」って言った
ら、

なんだかひどく叱られた。

気にしすぎだって言ってるのに、どうしてもそんなこというんだ、
っ
て。

でも、どうしても不安で仕方がないから、わたしは博之が会社に行
った後、

親友のマキちゃんに電話した。

マキちゃんは美容院で働いていて、今日はお休みのはず。

マキちゃんに事情を話すと、心配だからすぐいくわ、と言って、

本当に電話を切って1時間くらいで来てくれた。

「だいじょうぶ？　なんだか声が普通じゃないみたいだったから」

マキちゃんは同い年とは思えないほどスタイルが良くて、オシャレだな。

綺麗にメイクされた顔を見て、わたしは全然関係ないことを考えていた。

「うん・・・博之は、そんなはずないっていうんだけど」

「でも覗かれているような気がするのね？」

それって、気持ち悪いよね。マキちゃんが形の良い眉をひそめる。

マキちゃんはいつだって、わたしの味方になってくれる心強い親友だ。

博之と結婚するまえにも、たくさん相談に乗ってくれた。

わたしは、今朝、警察に相談したいと言って博之に叱られたことも、いままで本当に不安で怖かった気持ちも、全部マキちゃんに聞いて

もらった。

マキちゃんは、うんうん、と優しい声でわたしを慰めてくれる。

安心したのか、わたしの目からポロポロと涙がこぼれた。

マキちゃんは両手でわたしの頬を優しく包んで、

そして、言った。

「ほんとに、おぼえてないのね」

マキちゃんの声が、まるで地の底から響いてくるみたいに低くて暗い声だったから、

わたしはびくりしてマキちゃんの手を払いのけた。

「・・・マキちゃん？」

マキちゃんは、突然笑いだした。その美しい大きな声で、高らかに。
さんざん笑った後、マキちゃんは冷やかにわたしを見る。

そして、マキちゃんはわたしを台所に引っ張っていった。見たことのない、怖い顔で。

そして、わたしを突き飛ばして、台所の床を指さした。

「おばさんは、ここにいるじゃない」

なに？なんのこと？頭がまっしろになる。

「部屋の音がうるさいとか何とかで、おばさんが怒鳴りこんできたときに、」

あんたが首を絞めて殺しちゃったじゃない。

その手で。あんたが殺したのよ。

頭のなかがぐるぐると回り始める。

そんなこと、そんなこと。

あの日。そうだ、おばさんが何か・・・ほづきか何かを持って、怒

鳴りこんできたんだ。

それで、うるさいうるさいってわたしのことを何度も叩いて・・・

それで、もういや、いや、って思って、この手でおばさんの細い首を・・・

わたしは自分の手を見つめる。

マキちゃんは鬼のような顔で、言う。

「私が手伝ってあげたのよ？おばさんをこの台所の床下に片付けるのね」

>改ページ<

だって、博之が頼むんだもの。

あんなことが起こったとわかれれば、会社だつてくびになる。

せつかくのマイホームも手放す羽目になるかもしれないって。

だから、私が、手伝ってあげたのに。そんなことも忘れるなんて。

「・・・でも、おばさんはたしかに窓からのぞいていたわ・・・」

わたしの言葉に、マキちゃんはおかしくて仕方がないというふうにケラケラと笑う。

「ねえ、窓からのぞいていたのは、私よ」

だって、博之つたらあんたとはもう終わりだって言ってたのに、ちつとも別れてくれないんだもん。

私と一緒にいない間に、いちゃいちゃされたら腹が立つじゃない。

だからね。あんたたちのこと、ずっと窓から見てたのよ？

それもあんたにだけわかるようにね。

マキちゃんの言葉に、わたしは血の気が引き、全身ががたがたと震

えはじめた。

博之がそんなこと・・・？マキちゃんは どうしてこんな・・・

ガチャガチャと音がして、玄関からひとが入ってきた気配がする。

博之？こんなに早い時間に？

キッチンに入ってきたのは、たしかに博之だった。

わたしはもう、混乱して動けない。

マキちゃんが博之を見て笑う。

「私が呼んだのよ？そろそろカタをつけてほしいって」

博之は肩をすくめて、しょうがないな、と言う。

・・・しょうがない？

博之はわたしの耳元で、いつものように優しく頭を撫でながら囁く。

「おまえはおばさんがうるさくて邪魔だから殺しちゃったんだよね？」

わたしはうなずく。目の前が涙でかすむ。

「今度はおまえがじゃまなんだよ。ごめんな」

博之がわたしの身体に馬乗りになる。

そしてわたしの首を思い切り締め上げる。

抵抗しようとする手を、マキちゃんが全力で押さえつける。

ああ、もうわたし、死ぬのね・・・

ぼんやりとした意識の中で、すぐどこでもいいことが頭をよぎる。

寝室の窓は2階にあるのに、マキちゃんはどうやって覗いたんだろ

う・・・

薄れゆく意識の中で、最期にわたしが見たのは、

台所の窓からこちらを覗く、おばさんの黄色く濁った目だった。

（おわり）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0190z/>

となりのおばさん

2011年11月30日22時48分発行